

vol.54-02 (通算 611号)

2024年5月号

# やどかり

2024年5月15日発行

(毎月1回15日発行)

1987年12月19日第三種郵便物認可

発行人 公益社団法人やどかりの里

代表者 増田 一世

〒337-0043 さいたま市見沼区中川 562

TEL 048 - 668 - 0494

FAX 048 - 747 - 7030

URL <https://www.yadokarinosato.org/>

定価 50円 (含会費)

## 55周年の大きな節目を前に

やどかりの里は、2025年に創立55周年を迎える。精神障害のある人たちが1人でも多く精神科病院から退院し、「ごくあたりまえの生活」を実現することを目指して、1970年に活動を開始した。

55周年を前にして、やどかりの里が目指してきた「ごくあたりまえの生活」は実現しているだろうか。

「退院して良かった」「予想もしなかったほどに今が一番しあわせ」「生活は大変、でも人間らしいと思う」。これは、精神科病院を退院し、自由を取り戻した長期入院者の証言として、『響き合う街で68号』（やどかり出版）の特集の中で語られていた言葉である。一方で、長期入院に関する言葉として、「静かに耐えるしかなかった精神科病院での30年」「行くところがないから退院できなかった」「死んだ方が幸せ、生きる屍だった」といった重い言葉もある。やどかりの里がこのような声を聞くまでに、何十年もの時間がかかったことに無力感さえ感じる。

哲学者でもあり、日本の精神医学ソーシャルワーカーの草分けで、やどかりの里の存在意義を認めてきた早川進さん（1994年没）は、「あたりまえゆえに見えなくなってしまっているが、このあたりまえのつきあいや生活がやどかりの里にはある」「やどかりの里には、人と人との結びつきを基本として、自らを回復させていく栄養素のようなものがある」と、やどかりの里で開催した研修会で述べている。（45周年記念出版『障害者権利条約とやどかりの里』より）

やどかりの里のメンバーで長く理事を務め、退院支援活動にも関わっていた堀澄清さん

（2015年没）は、「精神疾患を発症したことにあわせ、人間らしい扱いを受けなかった精神病院での体験から、前科者という烙印を押されたような感覚で生きてきた」「人の世話になっているだけでは本当の回復にならない」「病気になった私をまっとうに扱ってくれる社会にこの日本を変えていきたい」と、やどかりブックレット『70歳を前にして新たな一歩を』で語っている。

お二人が残してくれた言葉は、援助する人とされる人という関係性の中では決して生み出されないものだ。やどかりの里が大切にしてきた、仲間同士の支え合いや、活動をいっしょに創り合っていく「共育ち」という文化があってこそ実現できるものだと言える。

2008年には、メンバー、家族、職員で議論を重ね、「1人1人が主人公」という活動理念を明文化した。誰もが活動の主体であり、活動に参画する主体者であるという思いが込められている。これは「私たち抜きに私たちのことを決めないで」という障害者権利条約の考えとも共通する。

今年度、55周年記念事業実行委員会を組織する他、メンバー、職員、家族への調査を行う。やどかりの里は、その時々为社会情勢を踏まえながら、実態を見る努力、実態から見えてきたことを社会化する努力をし続けてきた。調査はその重要な取り組みとなる。「ニーズから活動を創る」この姿勢は、創設者である谷中輝雄さん（2012年没）が実践を通して教えてくれたことでもある。

55周年がやどかりの里の歴史の中で大きな節目となるような取り組みにしていきたい。

(大澤 美紀)